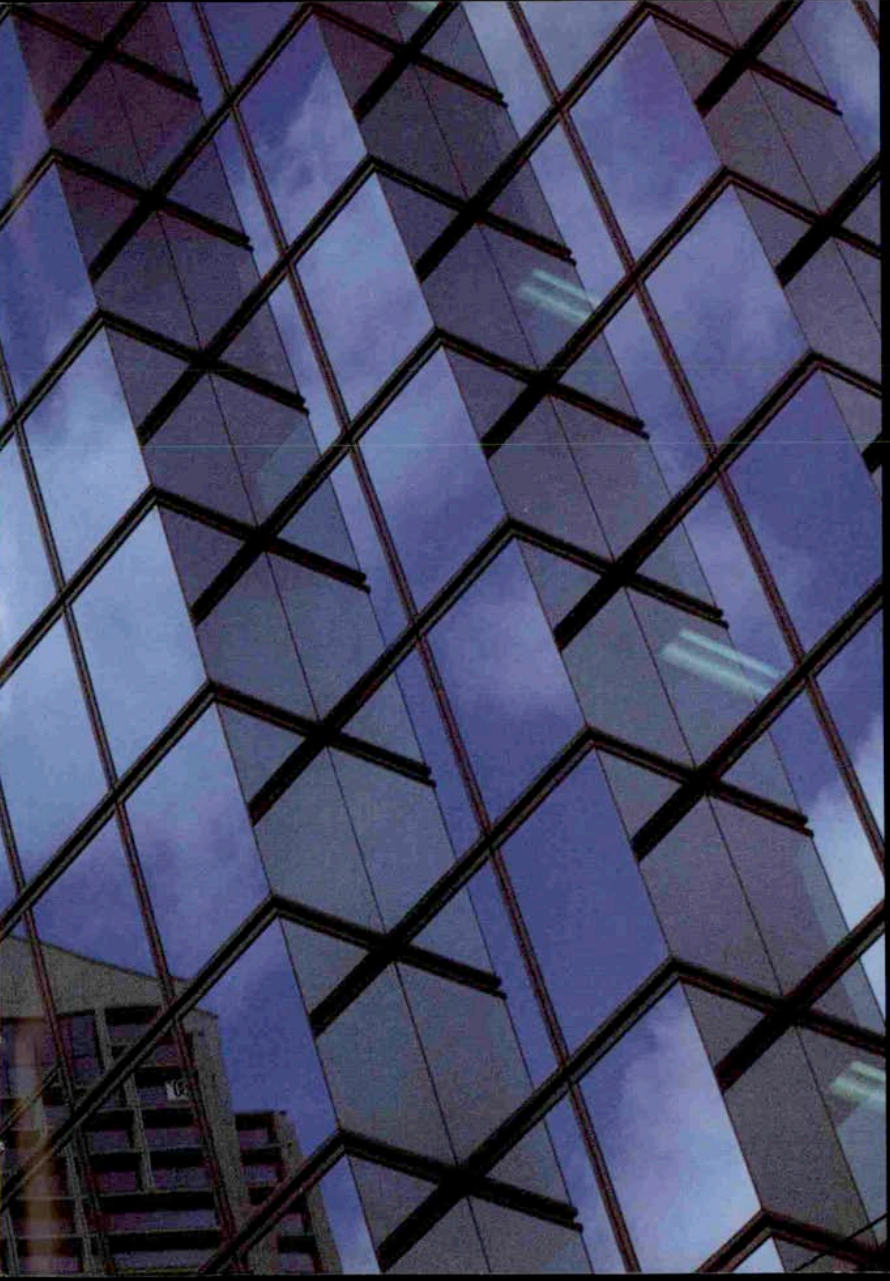
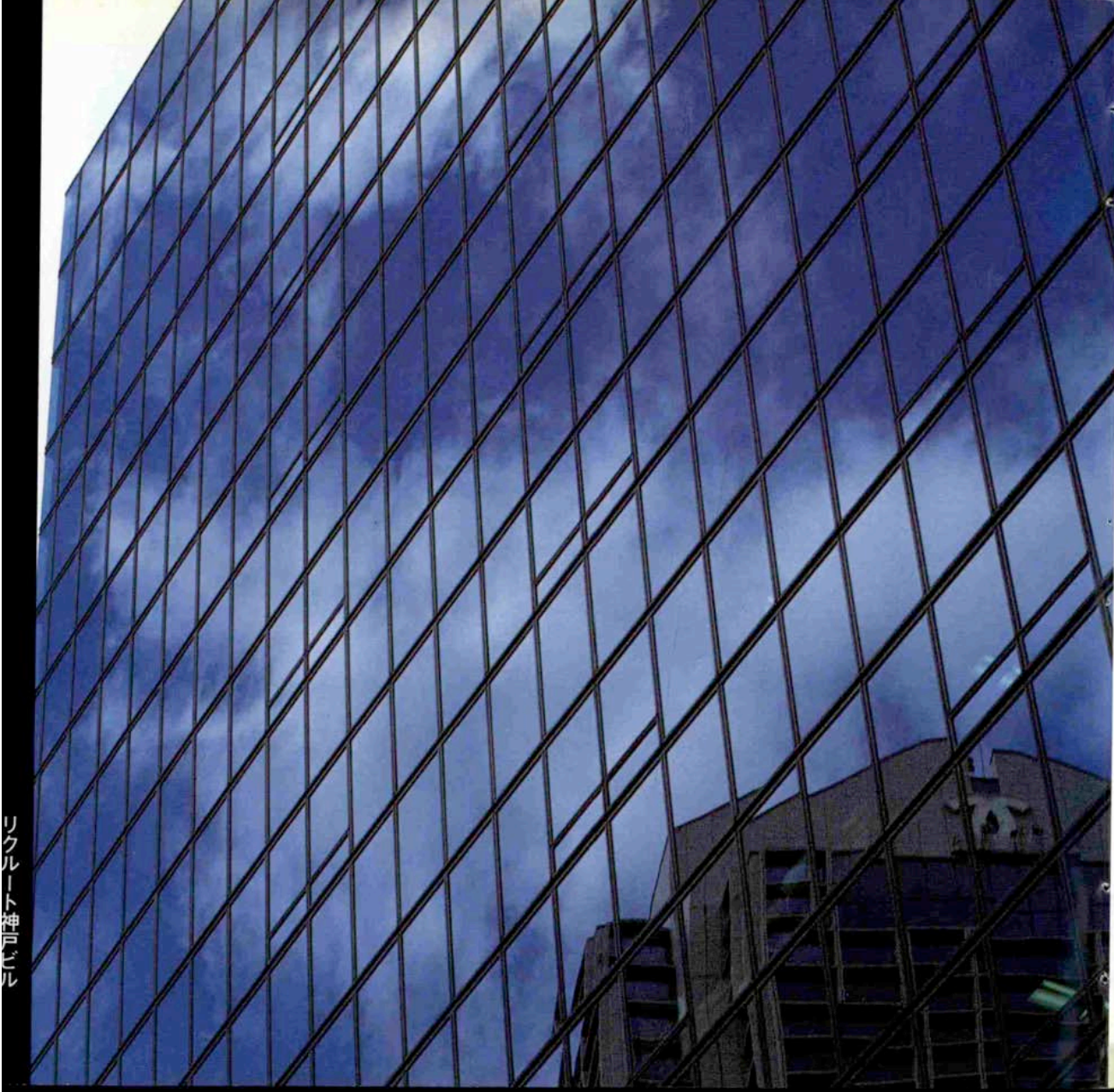


神戸新景

No.
20

P・小山　保



リクルート神戸ビル

GIVENCHY
NOUVELLE BOUTIQUE

右コクのあるワインカラーで、大人の女を表現。
ジャケット(スエード)……300,000円
ブラウス(毛100%)……95,000円
パンタロン(スエード)……300,000円
左オーソドックスなラインが、かえって新しい。
スーツ(毛100%)……250,000円
ブラウス(絹100%)……170,000円
※表示価格の3%を消費税として、別途頂だいいたします。

DAIMARU KOBE
電話(078)331-8121〈水曜定休〉
1〜4階・地1階は7時まで営業
5階〜屋上・地2階は6時30分まで営業

キャリアを重ねたエレガンス。

年を重ねるごとに、女性の魅力は深まります。女らしくなる、しなやかに円熟していく。それと同じようにジバンシィも、ますますそのエレガンスを色濃く、深くしていくのです。デザイナーがキャリアを重ね、生みだしたエレガンス。磨かれた本物を身につけたいあなたに、ジバンシィの秋。

■3階ジバンシィヌーベルブティック

NEW BOUTIQUE

美しさ、はじまる秋。

KRIZIA

PER

Sanohe

KRIZIA・KRIZIA POI・POI BY KRIZIA・KRIZIA JEANS

女性がもっとも美しく見える服づくり——。クリツィアの心です。
この秋、生まれかわったサノヘからあなたにお届けいたします。
〈クリツィア・ウォモはヌーベルサノヘにて扱っております。〉

Sanohe

神戸市中央区元町通２－５－７
PHONE (078) 331-4707
営業時間／AM11：00～PM7：00（水曜休）

White Ceremony

やわらかな陽差しをあびて、ゆっくりと花嫁が降りてくる。夏の海辺で、テニスコートで、ディスコではしゃぎまわっていた学生時代の彼女からは想像もできないほど優雅な大人の女性(すがた)に変身。きっとあれこれと思い悩んで選んだであろう純白のコスチューム、その胸もとにゴージャスな真珠がきらめいている。今日、誕生したばかりの新しいカップルをそっと見守りながら…。

山勝真珠

〒650 神戸市中央区山本通2丁目5番3号
(パールストリート) TEL 078-231-8141

山勝真珠さんちか店 三宮さんちか(ローザアベニュー) TEL. 078(391)4325
京都アーバンクロス店・心斎橋店・岡山店

JEAN-PIERRE RAMPAL

1 ANNIVERSARY
1周年、ありがとうございます。

開業一周年記念

フルートの帝王〝ジャン＝ピエール・ランパル〟リサイタル

フルートとパーティーの夕べ

●ピアノ：ジョン・スティール・リッター　●共演：フルートアンサンブル〝エリオ〟

今世紀最高のフルーティスト、
「フルートの帝王」ジャン＝ピエール・ランパルのリサイタルと、
彼と共演者を囲んでの懇親パーティー。
1周年の感謝をこめて、ゴージャスなひとときをお届けいたします。

フルート
アンサンブル
"エリオ"

寺野 智三子

上島 千佳

平尾 多美納

桜井 良子

熊本 尚美

鈴木 淳子

吉岡 美恵子

長谷川 博子

安藤 史子

10月2日(月)

6:30P.M.開演（パーティーは8:30P.M.～）

■リサイタル：
新神戸オリエンタル劇場（2F）

■パーティー：
大宴会場「真珠」（10F）

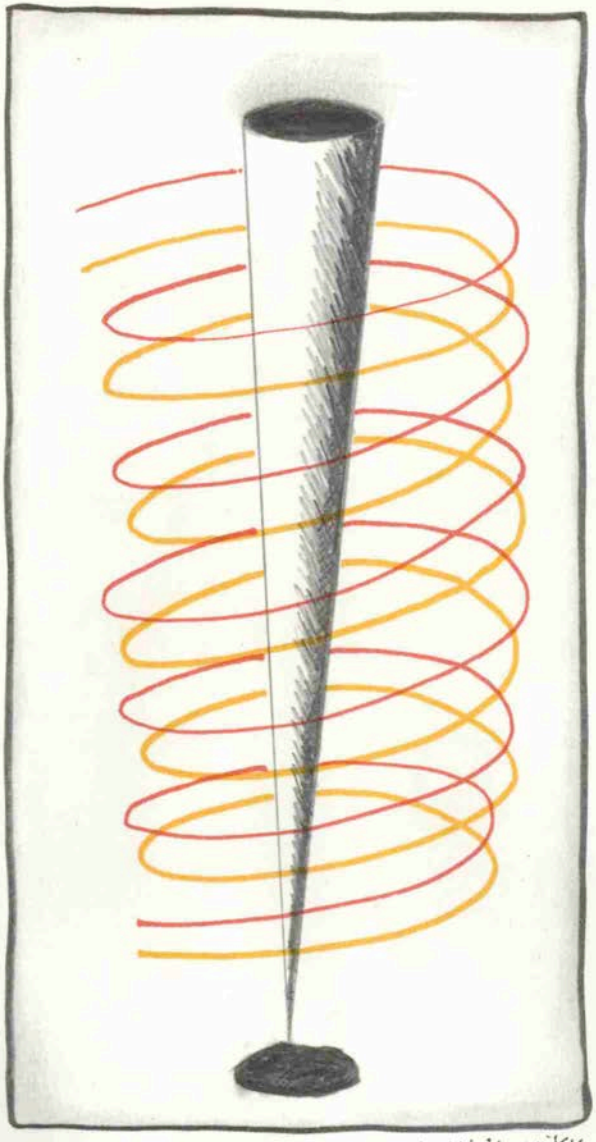
お一人様（自由席制）　¥10,000
（コンサート、パーティー（お料理・お飲みもの）及び、サービス料、税金を含みます）

チケットのお求めは
●新神戸オリエンタルホテル4Fフロント
または12F文化教室エリオカウンター
●さんちかプレイガイド
●チケットぴあ06-363-9999

懇親パーティーは、ブッフェ形式でございます。

お問い合せは
TEL(078)291-1121㈹
新神戸オリエンタルホテル
「フルートとパーティーの夕べ」係

新神戸オリエンタルホテル
〒650 神戸市中央区北野町1丁目



これは神戸を愛する人々の雑誌です
あなたのくらしに楽しい夢をおくる
神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ
これは神戸っ子の心の手帖です

9月号目次●1989・No.341

表紙／（故）小磯良平
セカンドカバー／西村　功
9　神戸っ子'89／花柳芳恵一子・上田貴弘
12　ある集い／秘書クラブ関西支部・モードメイトミチコ
15　神戸スナップ／神戸市役所新庁舎
16　美の小箱／文・増田洋／絵・保ケ淵静彦
18　神戸新景／カメラ・小山保
29　私の意見／臼杵裕子
31　随想四題／村上のぶ子・笹倉玄照・小坂洋子・岡田美代
35　地域文化論／嶋田勝次
36　エッセイ・旅のかたち〈13〉安水稔和　絵・中西勝
38　俳風エッセイ・和田悟朗　絵・津高和一
40　音楽夜話／コマキストクラブ誕生／北嶋敏男
42　経済ポケットジャーナル
44　キャンペーン座談会／ウインディ三宮が魅力ある劇場都市の"眼"に
　出席者／森本泰好・野村克彦・東条隆裕・熊野　稔・古川周二・長瀬基夫
　久利計一・中本信一・安藤輝雄・竹内　孝・西　昇・中西敏之・高木　剛
52　WFF情報ページ
56　結婚特集（Ⅰ）―対談「現代結婚事情」
　上沼恵美子 VS 小関三平
64　結婚特集（Ⅱ）―結婚したい男女が誌上で自己PR
70　結婚特集（Ⅲ）―幸せいっぱい！結婚アルバム
74　ネオモーダメルヘン／篠原順子
76　ファッションスポット
84　神戸のお嬢さん／長部浩子・植野智子
117　コーヒーブレイク
118　動物園飼育日記(285)・ゾウの動物園史／亀井一成
122　話題のひろば／岸野利男・長田神社
124　ふたたびプロフェッサーPの研究室／岡田淳
126　KOBEシャーロックホームズの冒険〈1〉／前田和穂
128　神戸を福祉の街に(189)／橋本明
131　KFSニュース
136　出会いの旅／スタインウェイをたずねて2・羅清水
138　神戸百店会だより
140　有馬歳時記
142　猫じゃらし／ラッキー植松
144　モダンカルチャー
146　シネマ試写室／「千利休」／淀川長治
148　ぴっといん
150　ポケットジャーナル
153　神戸っ子倶楽部会員情報
154　るぽるたーじゅ 神戸3／無汐庵・綿貫宏介の世界
　文・有井基
160　ショート・ショート〈4〉／Wherever You May Go
　玉岡かおる　カット・藤原護
180　ポエム＆コラージュ／金月妬子
182　海・船・港／観光潜水艇・かどもとみのる
カメラ／米田定蔵・池田年夫・松原卓也・森田篤志
目次カット／植松奎二

いよいよ9月14日(木) 開幕！

神戸市制100周年記念特別展

松方コレクション展

—いま甦る夢の美術館—

明治の神戸経済界の巨人・松方幸次郎が、壮大なロマンと巨費をもって収集した「松方コレクション」。
世界3大美術コレクションの1つと言われながら、幾多の時代の苦難の中にはかなくも崩壊した、この絢爛たるコレクションを追跡し、ここにその再現を試みる。幻に終った美術館建設構想など、市民・国民の文化向上を願ってやまなかった松方の熱情と夢を、神戸百年の今ふり返る。フランスからの初来日の作品をも含む総数約150点を展観。(写真はドガ「かるたを手にするメアリー・カサット」)

9月14日▶11月26日 休館日／毎週月曜日・11月7日

主催／神戸市立博物館・神戸新聞社・神戸市民文化振興財団
当日入場料／一般¥1,000・大学生¥800・高校生¥600・中小生¥400

神戸市立博物館

〒650 神戸市中央区京町24番地　TEL.(078)391-0035

●第3回リサイタル

若柳吉金吾の会

平成元年9月30日(土)午後3時開演
神戸国際会館大ホール／チケット5,000円

■プログラム

一、清元 吉原雀　若柳吉金吾 振付
一、清元 田螺と烏　若柳吉金吾 振付　堀山喜蔵 振付
一、大和楽 かくし道成寺　若柳吉金吾 振付　鶴寿美之丞作演出　芳村伊十七作曲　藤舎呂悦作調　若柳吉金吾 振付
一、長唄 春興鏡獅子
一、創作 車　若柳三郎 振付　吉田豊治 照明

■主催／若柳吉金吾の会 ☎078(341)6822

AUTUMN COLLECTION

メリーヒル
ゲルラン
ボンフカヤ
シス
ルーブル・
ブライダルサロン
ダイアナ
オフ
クロードレマ
タカノ
ココ山岡
三愛

キャンディッド・マス
メイソングレー
フォーセット
ペネトン
ラッキーズ
ハニーハウス
イーストボーイ
靴下屋
フェアリー
ザンパ
リップスター
ベイトンプレイス
ヴィフ
パルチザン
クレヨン
マリークワント

アラブグレッツ
トゥエンティワン
ミシュー・エタム
Aug
リーフノット
アトモスフェール
ヴィッキー
カポ
キャトルセゾン
ハウスオブローゼ
花Eソフィーナ
ワコール
トリンプ
ラパブル
ミセラン
シエル

FASHION PARK

神戸・三宮、さんプラザ2・3F
センタープラザ3F
営業時間 am 11:00—pm 8:00
PHONE—— 078・332・1698

神田くん、緒形くん、清水くん

MAC ORIGINAL JUMPER

ジャンパーは
僕らのユニフォーム

黒田さん

新屋さん、勝くん

MACオリジナル商品

フーディット ジャンパー
(メルトンウール100%)
サイズ／メンズ、レディス共
フリーサイズ
カラー／ネービー、レッド
ダークグリーン
マスタードイエロー
¥28,000

MAC
SINCE 1895 KOBE

HEAD OFFICE 7F NEW CENTER 1-6-22／SANNOMIYA-CHO CHUO-KU KOBE CITY 078-392-1651

SANNOMIYA MAC
THE BLAZER SHOP MAC
DOLCE MAC
FESTA MAC
BENETTON MAC
FUJIIDAIMARU MAC
SUNVIOLA MAC
PLENTY MAC

SANNOMIYA CENTER-GAI 1 078-391-0895
TOR-ROAD 078-391-0896
SANNOMIYA CENTER-GAI 2 078-332-0141
HIMEJI FESTA 2F 0792-89-4738
HIMEJI FESTA 3F 0792-22-1333
KYOTO FUJIIDAIMARU 2F 075-211-0857
TAKARAZUKA SUNVIOLA 3F 0797-71-4830
SEISIN PLENTY 2F 078-992-0088

□わたしの意見

世界の一流オーケストラが演奏するホールを

臼杵　裕子
〈兵庫銀行新神戸支店長〉

神戸は、何でも日本で〝初めて〟が好きな街です。

そんな神戸の街で、しかも新神戸オリエンタルホテルや、ショッピング街のオーパや、話題の新神戸オリエンタル劇場が一年前にオープンして活気づく、生田川の街角に、兵庫銀行新神戸店が開店いたしました。

この新神戸店は、私を始めとして行員全員が女性というスタッフです。「女の時代」といわれ、その先端を行くマドンナ銀行支店は日本初ということで、全国紙や女性誌にまでご紹介いただくという凄い反響に、当の私が面くらっている次第です。

ごく普通に、淡々と仕事を続けて来たものにとって、女性だからといった甘えはありません。只、現代は、ハイテクノロジーが銀行の中でもどんどん進行し、商品内容も業務も、金融から証券、外貨、保険、不動産、遺産相続など多岐に亘って参りました。

ハードな設備や業務が進むなかで、私たち女性スタッフは、銀行の中へ一歩入っていただくだけでソフトな雰囲気にと、インテリアにも、応待にも心がけて親しみやすく接客し、お客様に喜んでいただいております。ぜひお気軽にお立寄りください。

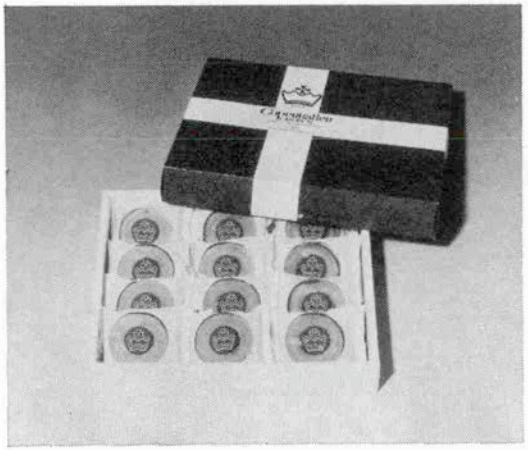
さて、神戸の街への意見ということなのですが、考えてみれば、私は西宮から通勤し往復の道中しか神戸を見ていないように思います。とても〝住みやすい街〟という印象が、四国高松の出身のものにとっても感じられることです。

ただ、いつも神戸は道を掘り起しているなというのが実感で、道がきれいになるのはいいことなのですが、ガス工事や、下水工事や、道路工事と、それぞれ別々に掘り起こすのは費用がもったいない気がいたします。市民の税金は、何度も同じことに使って欲しくない、大切によく考えて使って欲しいですね。

最近、私はピアノのお稽古を始めました。年も考えず楽しく熱中しています。神戸の街に、シンフォニーホールのような世界のトップオーケストラが演奏できるいいホールを創って下さったらもっと嬉しいのですが。

年輪の味わい

スモール・バウムクーヘン
〈コペンハーゲン〉



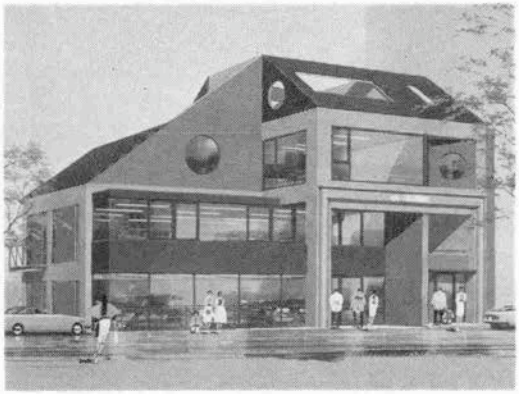
北ヨーロッパを代表するお菓子バウムクーヘン。スモール・バウムクーヘン“コペンハーゲン”の味わい深い素朴な味をどうぞ。

8個入……1,000円
12個入……1,500円
16個入……2,000円

北欧の銘菓

ユーハイム・コンフェクト

この秋
新しく
生まれ変わりました



★健保適用

芦屋 柿沼産婦人科

産婦人科・内科（女性専科）

新しい感覚でさまざまな女性の
悩みにお応えします。

芦屋市公光町7番11号
阪神芦屋駅北へ1分
芦屋警察署東隣り
☎（0797）31—1234
（FAX兼用）

随想四題

花咲け地方出版文化

村上のぶ子
〈童話作家〉

私が子供の頃は、町の子も田舎の子もおしなべて、遊び道具の多くは、豊かな自然からもらったように思います。タンポポの茎で作る水車、野の草で作る草ぶえ、男の子達は、青竹を割ってスキーを作ったりした。懐かしい思い出ばかりです。いつのほどからか、私は、詩や童話を書くようになりましたが、十年前、仲間を誘って日本児童文芸家協会の関西支部を結成しました。さっそく同人誌を出すことになり、皆で考え雑誌名を「あしぶえ」と付けました。その創刊号に私は、雑誌名と同じ題の「あしぶえ」という、こんな詩を載せました。

のずらに
　ひびく
あしぶえは
いつかどこかで
聞いたふえ
やさしい母を
　おもうふえ
のずらを
　わたる
あしぶえは
わすれたものを
　おもうふえ
だいじなものを
　おもうふえ

これは、私の児童文学に対する思いでもあります。今年は、支部結成十年になるのを記念して、「あしぶえ」創刊から二十一号までの作品を、作者の自選で「きまぐれな5つのホルン」という単行本にして、七月五日に出版したばかりです。5つのホルンに代表される、収録者五人それぞれの作品のおもしろさが、なかなか好評です。これからは、各人が、創作活動に一層力を入れて欲しいと思っています。支部では昨年から、少し大きな企画ですが、小学生対象の「ひょうご子どもの作文と詩のコンクール」を行い、成果を収めました。只今、二回目を開催中です。沢山の応募をお待ちしているところです。

今は、地方の時代、といわれて久しくさまざまなイベントが、あちこちで華やかに繰り広げられています。出版文化にも、その地方の薫り高いペンの花が咲く、地方の時代が訪れないものかと、一人勝手に夢みたりしています。

あしぶえ例会（村上さん宅にて）

教育報道社刊1200円

随想四題

ライフワークは藍木綿の美術館

笹倉 玄照
〈吉兆藍木綿製造家〉

仕事上の必要から集めました、古い藍木綿のおおらかな文様の、のびのびとした面白さを見ていただいた方々の多くが「是非、こうしたものは公開してほしいものだ」と、そんな声にほだされて、木綿の館建設の想いを私の生まれ故郷、西脇市の石野市長に話し、又、商工会議所の在田会頭らの肝いりもあって、いよいよ世界的な繊維の街、西脇市にスペースを頂いて発足することになりました。

江戸時代の末期から、庶民階級には重宝なものとして沢山作られた婚礼や来客用の布団の表地、夜着、風呂敷、油単、そしてのれんなど、昔の紺屋の職人達が当時は大切な木綿の布に心を込めて染めあげた素晴らしいものばかり！ スケールの大きさ、文様のユニークさ、流麗な線引、こればかりは小さな写真などではどうにもなりません。実物をみて頂く他、実感は湧きません。常々見なれている私でも、改めて見直してみる時々に、いつも新たな感銘を受けている程ですから。

一心に製作中の笹倉さん

平和に徹した江戸時代の余韻を多く残している吉祥文様の数々は、必ずや皆様方の脳裏に日本人の心意気と限りない郷愁を蘇らせ「日本人万歳！」の気持ちにさせるものばかりです。

ところで、美術館ばやりの昨今ではありますが、こうした庶民的な作品群を収容する美術館づくりを考える時、「格調高く！」とか「権威のある！」とか言った従来のパターンをやめて『ご来場くださる方々の目の高さで見て頂ける美術館』ということで「芝生の中に入らないで下さい」ではなくて「芝生の中に入って、おくつろぎ下さい！」といった考え方の運営を主体にしてみたいと思っています。そして加西市のフラワーセンターを中心にした、催し物めぐりを楽しめるバスツアーの中に組み入れて頂ける様な魅力のある美術館にしたいと夢見ております。

〝神戸っ子〟の読者の皆様方のご希望やご意見も沢山伺って〝くつろげる美術館づくり〟をさせて頂きたい！ というのが私の念願です。

東経百三十五度の子午線と、北緯三十五度の交わる日本の中央標準時間を司どるのは西脇市です。世界で最も近代化されたシステムで糸染織物（ギンガム等）を作っている西脇市は最も多彩な織物を作っている街でもあります。

ケッタイナ六十男の心意気に花咲かせて下さい。皆様のご声援お願いします。

随想四題

お菓子の旅・モナコ編

小坂　洋子
〈コーヒールーム カピラ経営〉

海外旅行のさかんになった近頃では、「モナコへ旅をしてきたのよ」といっても誰も別に驚いてもくれないけれど「モナコの皇太子にケーキを献上してきたの」というと、「へェー」と言われます。

私が趣味と実益をかねてお菓子作りをはじめて数年になります。その師である今田美奈子先生に実はこのお話が舞いこみ、私も助手の一員として同行する事になりました。

モナコ、と言えば地中海に面した、コート・ダジュール沿岸にある華麗なリゾート地で、世界のお金持ちたちが多く集まる場所と、あこがれてはいても、いささか縁遠い国でした。が、その国で王室や、政財界の方々に、私共の作ったお菓子を見ていただき、一緒に過す夢の様な出来事が現実に…。

行事の多いモナコの中でも、殊にアルベルト王子を会長と仰ぐ、モナコ・ヨットクラブ主催、海のF1モナコ・オフショアー・グランプリは、時速一〇〇マイルで疾走するパワーボートの競走で、人々が特に関心を持つものの一つです。事実、前夜祭から私達は驚きの連続で、自慢のパワー・ボートの上に、選手やユニホーム姿のギャル達を乗せての街中のパレードは、先導の音楽隊とボートのすごさで圧倒されました。レースはマシンの轟音・歓声・音楽が重なり合い、モータースポーツの魅力をたっぷりと味わうことができ、皇太子を迎えて式典と表彰式、そしてパーティとなり、私共のケーキが花をそえたわけです。

ヨットクラブのケーキを前に小坂さんと今田さん

一〇〇〇本のバラでかざったデコレーション・ケーキは、ヨットクラブの中で、一段と華やかさを増していました。王室が気軽に出席されるモナコのパーティは、素敵な方々がさりげないおしゃれで参加されていつの間にかはじまり、そして自然にもりあがって行き、拍手とか乾杯のない本当になごやかな素敵な会で、これがモナコのエレガントの一部かと大変に感心させられました。

このレースには、日本も初参加するはずが諸事情で不参加となり私共も少しばかりさみしく思いました。カシラギ殿下（キャロリーヌ王女の夫君）が三位になったりするあのレースの中に、自然にとけ込んで行ける日本男子が、出来ることなら海の街神戸から出現してくれると嬉しいのに、と思ったりしたことです。

これからも楽しい夢を見ながらお菓子作りにはげんでゆきたいと思います。

随想四題

パーティはやめられない

岡田 美代
〈演出家〉

このところ、世の中パーティづいていると思われませんか？ とくに神戸は土地柄というか、開放的で人好きのする神戸っ子が、寄るとさわると群れてさわいで、ご機嫌なパーティを開いているようです"…ということで、私もやはりパーティ漬かり。参加するのも多いですが、主催側にまわることもしばしばなんです。中でも先日ホテルオークラ神戸の平安の間で、三百人に余る紳士淑女を集めてのフォーマル・パーティは、それはそれは華やかなものでした。これは、神戸ネオ・トロピカル協会主催の「チャリティ精神のもとに、音楽とダンスを楽しむ社交パーティ」で、中心になって運営しているのは、デザイナーの藤本ハルミさん、月刊神戸っ子副編集長の小泉美喜子さんと私という、三人の独身女の、底力寄せあいパーティなのです。もともと35年の歴史を持つ「日本ネオ・トロピカル協会」（森 美代子会長）からの呼びかけで、恐る恐る支部を発足させたのが今から9年前。ダンスと音楽を楽しむ…といっても、いったい神戸には正式にソシャールダンスをする人がオラヘンのではないか？ そんな思いで始めたのが、今や広いフロアーに溢れるばかりの、素敵なカップルが登場することになりました。中心になっているカップルは、ご夫婦というのが多く、これがしっかりとした核になっているようです。

さて、私の役割りは、パーティの仕掛人。毎回毎回、パーティのキイ・ワードを作って、それにこだわりながらプログラムを作っていきます。ちなみに今回は、神戸市制百周年がそのキイ・ワード。タイトルを「KOBEハイカラナイト」とつけ、会場は万国旗の飾りつけ。お客様を迎える音楽はあの懐しい「天然の美」。乾杯は百人のお客様をフロアーに扇型に並べ、その要に今年満百歳の中井一夫元市長に立っていただき、神戸ワインでの豪華な乾杯。お料理も神戸にこだわった森シェフの演出。ダンス音楽も、懐しのメロディをアレンジしてのサービス。そしてゲームも、男女ペアで走る人力車ゲームや全員参加の花火大会ゲーム（花火は火薬でなく、足につけた風船をお互いに踏み破るパンパンという音をこじつけたもの）など。いや皆さんよく遊んで下さいました。感謝感謝。

やっぱりパーティはやめられない！

□お知らせ／9月16日（土）大津プリンスホテルにて日本ネオトロピカル協会「月見の宴」開催。

ホテルオークラ神戸でのパーティ風景

地域文化論

〈その121〉

伊豆・長八美術館

ポストモダニズムより日本近代初期が見えた

嶋田　勝次〈神戸大学工学部建築学科教授〉

▲伊豆・長八美術館

この建築は昭和五十八年夏建設され、六十年吉田五十八賞を得られ、ジャーナリズムの間では大分評判になっていた。ポストモダニズムの話題作といわれたり、これまでの建築の概念から大分はずれていて面白いとも思われたりしていたのだが、私にとってはどう見てもこれまでのまっとうな建築から見て茶化したりこけおどしの感覚がのぞいて見えるので、意識的に避けていたといった方がよいのだが、伊豆に出掛けた折に、その前を車で通りかかって、立ち寄るはめにおちいってしまった。

西伊豆の中部といえるのだろうか。漁村の中に無理して観光資源としてつくり出された美術館と思われるのだが、江戸時代末期にこの松崎町が生んだ左官鏝職人として「左甚五郎」伝説で象徴される本名入江長八を顕彰して、日本左官業組合連合会の物心両面にわたる全面的バックアップのもとにつくられて来たようだし、全国から選ばれた左官職人たちの誇りをもって腕をふるった結果の産物がここに凝縮してある。江戸時代以降の職人のレベルの高さがここで見られるのはよいのだが、ここの展示物からどこまでその技術の腕が見られるか分からない。最近の建築では、特に湿式ではなく、乾式構法のパネルを貼りまくって来ている建築から、ていねいな左官仕事を鑑賞する機会も少なくなってしまったので、一層ここでその心意気だけでも見せていただければありがたいのだが、と思う。

この建築家・石山修武氏は、昭和十九年岡山生まれの建築家で早稲田大学建築学科教授で脂の乗り切った年代といえよう。ダムダン空間工作所を主宰しておられる由である。早稲田の校風といえるかどうかは別にしても、スペインのバルセロナの十九世紀末の異端の建築家・ガウディへの注目の意識なども見られるのが面白い。

小さな二棟の建物の一方が長八展示室となり、もう一方が左官展示室となっていて、連続して見られるようになっている。その接点に玄関ホールがあり、八本の柱に支えられた上部が球形のドーム屋根になっている。

西伊豆の漁村に観光の目玉をつくろうとした町長さん以下の意欲と、建築家たちのポストモダニズムを築き上げようとするエネルギーには敬意を表したいのだが、この美術館のようなものの積み重ねから近代建築を乗り越えるものに育って行くのかについて、やはり疑問視したい気分をもった。

南伊豆から西伊豆にかけて、なまこ漆喰壁の伝統が地域で息づいている様子を車で通って感じさせてくれていたが、この建築の中庭にもその片鱗がのぞいていた。また、この伊豆地域にある擬洋風の日本近代初期の伝統が、ここで花開いたといえるのかどうかについては全く自信はない。ただ松本の開智学校とか金沢の尾山神社神門などだけを思い出しても、何故か当時の新しい日本をつくる稚拙な努力に一脈通ずるものがあると思うと共に「盲蛇におじず」の感覚を見たことだけは確かであり、いろんなことを考えさせてくれたのはありがたかった。

随想
旅のかたち〈13〉

山の宿

安水稔和
絵／中西勝

山頂へ向かう尾根をのぼっていくと、右手にひろがる谷から風が吹きあげてきて、左手の谷へ尾根を越えていく。崖ぎわのわずかの草木はみな風に打たれて倒れ伏している。枝は曲がり茎はよじれ葉はちぎれて。風は絶えまなく吹きつづけているのだろう。絶えまなく尾根を越えていくのだろう。その風のなかでたくさんの赤とんぼを見た。風に乗り風に逆らい高く低くたくさんの赤とんぼが尾根をとんでいた。こんな高いところに、こんな吹きっさらしのところに、どうしてこんなに赤とんぼが。ひろがりのびるはるかな山並みの明るい影の重なりを背に、おもいがけずおもいがけないところにあらわれたおもいがけないたましいのような、あえかに浮いて漂うたましいのようなものたち。足もとには岩にしがみつく花々。耳もとを過ぎる風の音にまじる鳥の声。たえず夢のようにうぐいすの声。雲の影がくっきりと山肌を染めて近づいてくる。

山ふところの村の宿は、谷川ぞいの道に面して高い石垣のうえに立っていた。ひまわりが揺れ、ふようの花が咲きこぼれ、あじさいが咲き残り、ほうせんか、つめきりそう、にちにちそう、軒のはずれからはのうぜんかつらの花が見おろしている。色とりどりの花のなかを、石垣のうえを、窓のまえを、遠く近く赤とんぼが群なしてとんでいる。

納屋のまえに数本、屋根までまっすぐのぼっているのは朝顔か夕顔か。葉は丸葉で夕顔のようだが、夕方になっても開かないから朝顔だろうか。ひとつの葉のもとのところからいくつも花芽の出ているぐあいは、朝顔でも夕顔でもない別ものであるようで。宿の人にきくと、山ぎわで見つけて取ってきて植えたもので、名前はわからない。朝咲くから朝顔かなあ、ということで。次の朝、見事に開いた白い花のまえを通って川のそばの空地におりていくと、朝の光に羽根をぬらして飛びかい、見上げると頭上の電線にずらりと並んでとまっていた赤とんぼ。

脇道をたどって、谷川へおりていくと、稲の葉のそよぐ田の隅で、沢ガニがいて黒い丸いものをいくつも抱えこんでいる。しゃがんでよく見ると、ことは逆であって、オタマジャクシが沢ガニにくらいついているのだ。丸々とふとったオタマジャクシが勢いよく尾を振り体を揺すっている。

気がつくと畦ぞいにたくさん泳いでいる。それにしても今ごろオタマジャクシとは。

川を渡ったところに畑があった。人の背よりも高く茂った蔓の先に赤い花が咲き乱れている。よく見ると、大きいので四十センチをこえる莢が葉のあいだにぶらさがっている。花が赤いから赤い豆が入っているのだろうか。それはないか。また、川に出た。川下から川面を伝って大きな揚羽蝶が飛んできた。川ぞいの木立をぬって川上へ。見送ってほっと一息つくまもなく、また川下から川面を伝って鮮やかな幻がゆらりと。

宿で千本搗きをみせてくれた。ふつうの杵ではなくて木の棒で、一人でなくて三人がかりで、三人それぞれ木の棒を持ってかわるがわる搗く。掛け声はヤホヘ。最初の人がヤ、次の人がホ、三人目がヘ、ヤホヘヤホヘと掛け声かけて搗きあげる。

宿の人の話では、昔この村では毎年大晦日に山へ若い娘をさしだしていたが、えらいお坊さまのおかげでさしださなくてもよくなって、かわりに餅を搗いて供えることになったとか。ヤホヘという掛け声はお坊さまの発案で、この掛け声だとツバがとばないとか。搗くのを見ていると、なかなか威勢がいい。なれないと三人息を合わせるのが大変なようで。ヤホヘヤホヘとせわしなくヤホヘヤホヘとつづけさまに搗きつづけて、頃あいをみてヤホヘを止めて手水をつけることになる。

一二三一二三ヤホヘヤホヘと搗くのをみながら、どこか似ていて全然ちがう掛声をどこかできいたなあと考えていたら。思い出した、花祭だ。ひところ通いつめた奥三河の霜月神楽花祭。トーホヘトホヘともテーヘロテヘロともいって舞う。トホヘとヤホヘは似ているが、トホヘトホヘではない、トーホヘ〻ホヘと舞う。石の臼を囲んでの千本搗きを眼前に、土のかまどの火を囲んでの花の舞をぼんやりとおもいだしたりして。似て異なり、異なりつつも同じ人の世のなつかしい仕草、うれしい身振り、重さねて見詰めて。そろそろ餅は搗きあがったかな。

俳風エッセイ

なにか変ったこと

文・和田悟朗
絵・津高和一

小学校の二、三年生のころだったか、夏休み中の日記を書くことが宿題に出た。私はほとんど毎日「あさおきてから、いろいろのことをしてねた」と書き続けた。返してもらって先生の批評をみると、「いろいろのこととはどんなことですか」「なにか変ったことはなかったのですか」などと書かれていたのをおぼえている。

私の書いたことは虚偽ではないから仕方がないのだ。いま考え直してみると、「いろいろのこと」は毎日繰り返えされる日常を意味し、先生のいう「なにか変ったこと」とは特別な出来事のことで、いわば非日常としての一回きりの行為や事件を指しているのであろう。

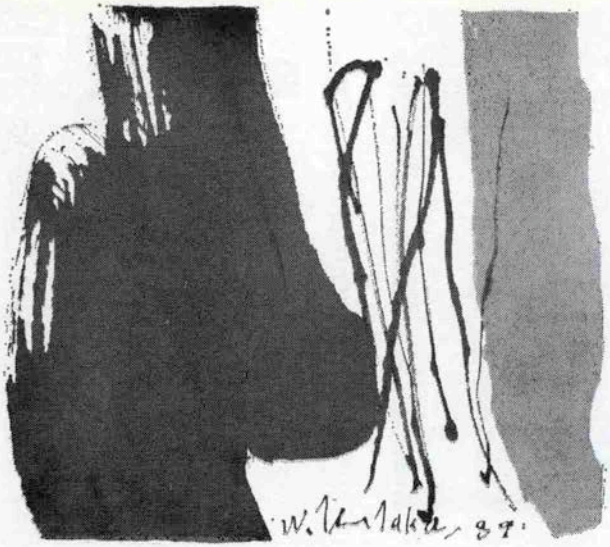
毎日毎日の日常は同じようなことばかりだが、人生の大半はそのような平凡で占められ、そのことが累積して重要な意義をもっている。それに対して、変ったことは滅多に起こるものではなく、何度も何度も訪れることはないが、それが急に人生を変えたり、それほど大袈裟でなくても、永く記憶に残るものだ。

当時の私の「いろいろのこと」の詳細は次のようなことであった。朝起きて顔を洗って朝飯を食べて……という不動の反覆の合間には、屋外で遊んだ。走ったり、木に登ったり、川に入ったり。このようなさまざまの行為は、単なる時間過ごしにすぎないようだが、しかし木に登って枝が折れたり足を滑らせて木から落ちる体験によって、物質の強度やさまざまの物理学がぼんやりと理解される。私の家の前には石屋川が流れていたので、川砂や石で水を堰きとめ、それがやがて決壊するのを見て、知らぬまに流体力学を体験したりもする。路傍の雑草や山川の虫や鳥などを追うているうちに動植物の生態に接したであろう。さらに近所の友だちとさまざまな遊びに興ずることによって人間関係について学ぶことが多かったにちがいない。日常の「いろいろのこと」は、個々についてはとりたてて目ざましい特徴はないが、沢山積み上げるうちに形成されてゆく何物かである。

このような有りふれた日常の繰り返しは、生活のバックグラウンドのようなものであって、それにひきかえ稀に起きる際立った身辺の出来事は、何月何日の記録としてその上に顕著に残る。大きな台風襲来、いとこの死、サーカスを見に行ったこと、はじめて琵琶湖まで行ったこと、二・二六事件、戦争勃発などなど、これらは私の少年時代の非日常の事件として突出している。

「晴」に対して「褻」ということばがある。褻はいっぱんには普段のままの私的な日常を指す。毎日の些細な「いろいろのこと」である。だから晴は非日常で、緊張や形式張った気持をともな

う。今年は松尾芭蕉の「おくのほそみち」三百年目の記念の年で、奥州はいまそこを歩いてみようという人達でたいへん賑わっているらしい。その芭蕉が「旅を住みかとす」「古人も多く旅に死せるあり」などと書いている。旅は非日常であり、まして旅に死す（客死）とは、非日常のきわみであろう。ところが芭蕉は旅を住みか（日常）にしようというのだ。むかしはふつう、旅に出ると突発的な思いかけぬことに遭遇し、不便や困難や危険の中をたえず緊張しながら一日一日を送らなければならなかった。今日のように旅行会社が万事親切に準備や案内を整えてくれ、したがってむしろ日常のわずらわしさから逃れるために、団体旅行に加わるという場合とは全く逆であろう。つまり、芭蕉は旅の中で日常生活を続けようとしているのである。しかし、人生は一つの旅路であるという思想に従えば、われわれ誰もが旅を住みかとしているといってよい。



俳句では季節感というものが大切だといわれている。地球の上で、どの場所でどの月日という空間と時間の位置を設定してしまうと、その季節感はほとんど予想通りに決定していまう。このような確かさは弥生人的、あるいは農耕民族的な期待感に基づいており、季節感というものにはあまり意外性などはないのである。幸い、日本では雨が降ったり雷が鳴ったりして、天候には日々多少「変ったこと」が起こりうるが、砂漠地帯ではそれすらない。

最近、ある俳人たちが、決まりきった季節感に基づく従来の「歳時記」とは違って、別の分類によって、生活のあらゆる部分を見直そうとしている。その中に「生きる」「働く」「遊ぶ」等々の項目が出て来る。そしてとうとう「冠婚葬祭」を遊びの中に入れてしまった。本来、冠婚葬祭は儀式（晴）であったが、現代感覚では遊び（褻）であるらしい。もっとも遊びとは何か、ということが次の問題となるのだが。

いずれにしても、「いろいろのこと」と「なにか変ったこと」は生涯に起こる別々の波である。われわれには、予期される未来と、予期されない未来とが待ち構えている。

〈**著者紹介**〉一九二三年兵庫県生まれ。「白燕」同人。句集に『七十万年』『現』『法隆寺伝承』等、多数。最近作『俳人想望』は、作家論、俳句鑑賞ふうの文章を集めた随想集。現代俳句協会会員。奈良女子大学名誉教授。東灘区在住。